

- ・施設紹介
- ・展示報告
- ・イベント報告
- ・学芸員コラム
- ・学芸茶話



与謝野晶子生家
「駿河屋」の再現

……………編集後記……………
平成27年3月の開館以来、日本国内はもとより、アジアを中心とした海外の国々からも多くの皆さまにご来館いただき、無事に2周年を迎えることが出来ました。今後も展覧会を通じて堺の魅力を発信してまいります。どうぞご期待ください。
(餅原)

堺市内には晶子生家である駿河屋の建物は残っておらず、生家跡近くに右の歌の碑が建っています。
晶子は明治11(1878)年12月7日に和菓子商の駿河屋(現在の堺市堺区甲斐町西1丁付近)の三女として生まれ、22歳で上京するまでを堺で過ごします。生家「駿河屋」は、晶子の祖父が大阪の駿河屋に奉公し暖簾を分けてもらったことが始まりで、父宗七が大阪の店をたたんで堺に引っ越し店を大きくします。
与謝野晶子記念館では、晶子が堺で過ごした様子を体感できるように『住吉・堺豪商案内記』(1883年刊)などの資料をもとに、ほぼ実寸大で駿河屋の帳場を再現しました。駿河屋という老舗というイメージがありますが、晶子の随想などに記された擬洋風と呼ばれる和洋折衷の建物を再現することで、西洋の雰囲気の家で晶子が少女時代を過ごし、その感性を磨いていたことを感じていただけるようになっています。
父宗七が西洋好みであったことを象徴するように、2階に洋風の窓があり、当時では珍しい時計がある和洋折衷の建物を再現しています。1階には、晶子が店番や帳簿付けをしながら父の蔵書を隠れ読んでいたと言われる帳場を再現し、その中で晶子の回想文「私の生ひ立ち」を中心に、故郷への思いを紹介することで、文学活動の出発点とも言える駿河屋を感じていただけるようになっています。
なお、駿河屋の帳場には、通常上がっていただけませんが、特別なイベント時には参加者の方々に上がっていただくといった活用もしています。
(森下)

海こひし潮の遠鳴りかぞへつ
少女となりし父母の家
晶子



岸谷勢蔵「堺燈台と大浜の夕暮れ」
(昭和時代・堺市博物館蔵)

千利休茶の湯館の茶室床部分には、古溪宗陳追院の偈(三井記念記念美術館)の複製が掛けられています。偈の末尾には「葦烟雨白鷗前」の七言が記されます。白鷗は、中国古典、その流れを汲む禅林文学において、自由な精神を表しました。名利を離れ大徳寺を去る古溪は、利休にその心持を風流の裏と自由の白鷗で表現したのです。
一五九一年利休が没し時が流れました。天王寺屋津田宗及の息子江月宗玩(一五七四〜一六四三)は利休画像に、「常対江南野水流、白鷗真眼叫同遊」(常に江南野水の流れに對す、白鷗、眼を真して、同遊と叫ぶ)との語を賛します。芳澤勝弘さんは、「利休居士はつねに江南すなわち堺の地で(白鷗のような)無心の境界で、日を送って居られた。(水辺で無心に遊ぶ)白鷗は、翁の無心ぶりをよく分かっていたから、利休居士こそはわが真の友よ、と呼んだことであろう。【芳澤勝弘編著】『江月宗玩欠伸稿訳注 坤』(思文閣出版、二〇一〇年)六六四・六六五頁)と訳しています。
堺浜で眠り、堺の海を自由に飛ぶ鷗。堺で生まれ育った利休も江月も夕陽が美しい堺の海と鷗の姿を見て育ったことでしょう。利休や江月が暮らした、その生涯を終えた京都には海がありません。利休は山野を愛し市中の山居を尊びましたが、その心の中には故郷堺の海とそこに自由に遊ぶ鷗の姿があったのかもしれない。
(矢内)

自由な鷗の精神「葦烟雨白鷗前」

ご利用案内

- 休館日 ●千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、茶の湯体験施設 第3火曜日(祝日の場合は翌日)及び年末年始
●観光案内展示室 年末年始
●駐車場 年中無休
- 開館時間 ●千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、観光案内展示室 午前9時~午後6時(最終入館 午後5時30分)
●茶の湯体験施設 午前10時~午後5時(最終入席 午後4時45分)
●駐車場 24時間
- 駐車場 ●普通車 1時間200円(1日最大1400円) ※さかい利晶の杜施設利用者に割引があります。
●バス 1回1,000円【予約制】



交通アクセス

- 阪堺線 宿院駅より徒歩で1分
- 南海高野線 堺東駅よりバスで約6分(宿院バス停下車)
- 南海本線 堺駅より徒歩で約10分 バスで約3~5分(宿院バス停下車)
- JR阪和線/南海高野線 三国ヶ丘駅よりバスで約10分(宿院バス停下車)
- 阪神高速15号堺線 堺ICより車で約3分
- 阪神高速4号湾岸線 大浜ICより車で約3分

利用料金

区分	大人(大学生含む)	高校生	中学生以下
観光案内展示室	無料	無料	無料
千利休茶の湯館・与謝野晶子記念館 ※1 (2館ともご覧いただけます)	300円	200円	100円
立礼呈茶(抹茶と和菓子)	500円	400円	300円
茶室お点前体験【予約制】	500円	400円	300円
さかい待庵特別観覧セット【申込制】 (展示観覧・立礼呈茶含む)	1,000円	800円	500円

※1 常設展観覧料は障がいのある方と介護者、堺市内に在学の小中学生と引率教職員、未就学児は無料

開館1周年記念展「寿ぎの品々——三千家からのおくりもの」 平成28年4月15日(金)～5月29日(日)

本展は、さかい利晶の杜が3月に開館1周年を迎えたことを記念し、三千家よりご寄贈いただいた品々を紹介したものです。表千家と妙斎御家元ご寄贈の「流水扇面絵茶碗」（17代永樂善五郎造）や三千家御家元命名の茶室軒号を揮毫いただいた掛軸等を展示しました。

(小松原)



企画展「天下をめざす——てがみから読む戦国時代——」

平成28年9月9日(金)～10月16日(日)



昨年引き続き、秋に企画展「天下をめざす——てがみから読む戦国時代——」を開催しました。大河ドラマ「真田丸」の影響もあり、全国的に戦国関係の展覧会が多いなか、本展では戦国時代を生きた人々によって記されたてがみを取り上げ、3つのテーマに分けて紹介しました。展示資料はすべて堺市博物館所蔵です。そのうち利休のものを含む8点は、開館に向けて資料収集の中で、福井県の宇野茶道美術館（平成8年～23年）よりご寄贈いただいたものです。今回はそのお披露目の機会でもありました。

第1章では「天下人のてがみ」をテーマとして、織田信長、豊臣秀吉などのてがみを紹介しました。信長のてがみは、叔母宛にかなで書かれた珍しいものです。秀吉は展示替え分合わせて3点のてがみを展示しましたが、なかでも奥方宛に「みかんを送るのでみんなで分けるように」と配分率まで指示したものに注目が集まったようです。天下人となる前の若いころや家族宛のてがみに触れることで、その人物をより身近に感じることができたのではないのでしょうか。

第2章は「武将のてがみ」として、武田信玄、安宅冬康、石田三成、伊達政宗などのてがみを紹介しました。安宅冬康は堺とも関係の深い三好長慶の弟で、連歌を好んだ武将です。展示したてがみも和歌集に関するもので、武骨な武将のイメージを払拭してくれます。伊達政宗のてがみは大坂夏の陣後、將軍秀忠の江戸帰還に触れたもので、てがみの日付の翌日に元和と改元、慶長最後の日のてがみとなりました。豊臣家が滅亡し、本格的に徳川の治世がはじまる、そんな激動の時代を活躍

写しています。第3章は「茶人のてがみ」として、千利休、古田織部、小堀遠州などのてがみを紹介しました。利休のてがみの1つは娘婿宛で、堺奉行松井友閑の来堺を伝えたものです。また弟子である舟越景直宛のてがみでは、天野酒を送られたことに対する御礼と秀吉の弟であり政権の中枢にいた豊臣秀長の来訪について触れており、利休と秀長の関係性をうかがうことができます。このように3つのテーマに分けて紹介しましたが、一通のてがみからさまざまなことが読み取れたり、また書き手の意外な一面を垣間見ていただけたのではないかと思います。



また戦国時代には魅力的な人物が多いことから、展示室の一角に

「戦国時代の人物で誰が好き!!」というコーナーを設け、みなさんに好きな人物を付箋に書いてパネルに貼っていただきました。ここではベスト5を紹介します。第1位織田信長（26票）、第2位真田幸村（信繁、20票）、第3位千利休（19票）、第4位伊達政宗（12票）、第5位武田信玄（10票）；以下豊臣秀吉、石田三成、黒田官兵衛と続きました。信長はやはり人気が高いです。また利休の人気が高いのは当館ならではのようですが、大変嬉しい結果でした。今回の展示では紹介していない人物もたくさんあげていただき、戦国時代への関心の高さを感じました。 (小松原)

企画展「与謝野晶子と三つの舞台——堺・京都・東京——」 平成28年11月11日(金)～12月18日(日)



本展では、与謝野晶子と関わりの深い三つの舞台、堺・京都・東京にスポットをあて、各都市で生み出された作品や関わった人々について、京都府立総合資料館、鞍馬寺、日本近代文学館の資料を中心に約80点を展示しました。堺は晶子が少女時代を過ごし文学に目覚めた舞台、京都は源氏物語の、そして与謝野寛との恋の舞台、東京は「明星」を中心に大きく活躍した舞台と位置づけ各都市を紹介し、都市と晶子の関わりを、ご覧いただきました。

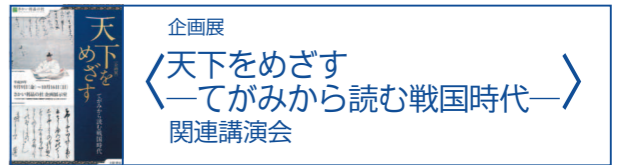
「はじまる堺」のコーナーでは、晶子が堺時代に入会していた「浪華（関西）青年文学会」について主に紹介しました。晶子はその堺支会の設立と同時に入会しており、これをきっかけに与謝野寛とめぐり合うこととなります。堺支会には小林天眠が河井醉茗の協力を仰ぎ設立されたものであり、この2人の文学者についてもあわせて紹介いたしました。文学青年たちの盛んな活動の渦の中で、晶子も創作に励んでいたのです。

「恋する京都」のコーナーでは、晶子と京都の関わりを紹介しました。京都には晶子が寛・山川登美子とともに

遊び、寛と結ばれた場所のため、晶子は京都を詠みこんだ恋の歌を多く作っています。また、京都には寛の出身地であり、源氏物語の舞台でもあります。堺時代から何度も訪れ、舞妓を好むなど、晶子は京都に特別な想いを持っていました。晶子・登美子とともに詩歌集『恋衣』を共著した増田雅子の弟が所蔵していた「百首屏風」が特に好評で、屏風の前に立ち止まってじっくりと作品を、ご覧になられている方が多くおられました。また、晶子が多く業績を残した「源氏物語」についても紹介しました。関東大震災でただ一枚のみ焼失を免れた「源氏物語講義」原稿の複製、晶子の晩年の大作『新新訳源氏物語』の完成祝賀会の際に晶子が着用した着物などを展示しました。京都に関連する資料は美しいものが多く、特に目に鮮やかなコーナーになりました。 「はじまる東京」のコーナーでは、特に「明星」と、交流した人びとについて紹介しました。「みだれ髪歌歌留多」や「明星」の原画のほか、森鷗外の年賀状や石川啄木が描いた番付表なども展示し、東京新詩社のにぎやかな雰囲気と、晶子が寛と目指し続けた創作の姿をお伝えできたのではないかと思います。 特に交流の長く続いた小林天眠についても取り上げ、関西青年文学会の後進事業「天佑社」や、堺市にお預けいただいている小林天眠旧蔵の資料を展示して、長きにわたる交流と支援の一端をご

覧いただきました。 コーナーを堺・京都・東京の三つに分けて展示を行いました。資料と都市とを結び付けていただきやすいよう、イメージカラー（堺＝青、京都＝ピンク、東京＝黄色）の設定や、地図で場所を示すなどの工夫を試みました。地図はケースの中と外に1つずつ設置し、ケース外の地図には来館者の皆さまに三つの舞台の思い出を書いていただくようにしました（左上写真）。特に堺の思い出を書かれる方が多く、より地域と晶子とを身近に感じていただけたのではないかと思います。また、より深く資料について知っていたために「もっと楽しむみどころガイド」を作成したところ、熱心に資料を見ていただける方が増えたのは嬉しい成果でした。 (安達)



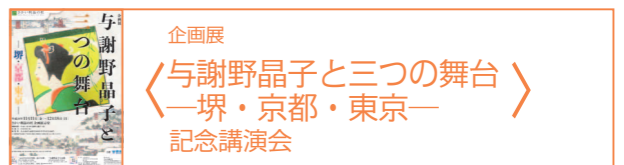


▶企画展「天下をめざす」の関連講演会第1弾として、高槻市立しろあと歴史館学芸員・中西裕樹氏にご講演いただきました。堺市内に残る陶器城（中区）、家原城（西区）などの城跡やさかい利晶の杜のある堺環濠都市遺跡について、たくさんの絵図や写真でご紹介いただきながら、城郭史的な位置付けについてお話しいただきました。また和泉国内に残された城跡について、その地形や時代背景を含めて解説いただき、戦国時代への理解を深めることが出来ました。

10/10(月・祝) 堀新氏講演会
「天下人と堺 一てがみから読む戦国時代」



▶企画展「天下をめざす」の関連講演会第2弾として、共立女子大学文芸学部教授・堀新氏にご講演いただきました。まずは戦国時代の堺について宣教師の残した記録を中心にご紹介いただいたのち、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という3人の天下人と堺の関係について書状（てがみ）を通してご紹介いただきました。信長については企画展で展示中の小幡殿宛書状を解説していただいたあと、堺出身の茶人である今井宗久や千利休との書状を通して、堺と信長のつながりについて詳しく取り上げていただきました。



▶地域資料担当として長年与謝野晶子などの堺に係る資料の収集に関わっている竹田芳則堺市立中央図書館主幹が講演を行いました。晶子と堺のかかわりを、図書館所蔵の資料を中心に紹介し、晶子の堺時代の回想文に登場する場所を写真と合わせて説明するなど、詳細な紹介を行いました。参加者からは、堺出身をより身近に感じさせる話だった、続編を期待する、というお声をいただきました。

12/17(土) 入江春行氏講演会
「与謝野晶子と京都」



▶日本文芸学会常任理事で、与謝野晶子倶楽部副会長の入江春行氏にお越しいただきました。先生の研究によって明らかにされた晶子と京都の様々な関わり、特に晶子と寛、登美子と京都の関わりを詳しくご紹介いただきました。晶子歌碑についてもスライドでご紹介いただき、参加者からは、はじめて知り得たことがあった、先生のお話を聞いたことは大きな喜びだった、というお声をいただきました。

(右) ご挨拶いただく中西進名誉館長
(左) 当館報告の様子



第7回全国文学館協議会
総務情報部会

・日時 平成28年11月25日(金)
・参加者 52名(38館・団体)

▼与謝野晶子記念館が開催館として「全国文学館協議会総務情報部会」を開催しました。総務情報部会ということで、①地域や企業との連携事業、②旧居の保存と公開というテーマで、当館をはじめ、新宿区立林芙美子記念館(東京)・泉鏡花記念館(石川)・中原中也記念館(山口)の4館が報告を行いました。

開会にあたっては、当館の学芸部門を担っている堺市博物館の中西進名誉館長がご挨拶をさせていただきました。「文学館の在り方」についてお話いただき、「文学の展示」というのは、感動という目に見えないものを形にして記憶させる」という言葉が参加者の共感を呼び、大変印象に残っているように感じました。

①地域や企業との連携事業について
当館では、「与謝野晶子記念館の開館から現在にいたるまで」と題して、「さかい利晶の杜」内に開設するまでの経緯や目的をはじめ、管



「文スト」コラボ企画のチラシ

理・運営に関する現状と課題について報告を行いました。また、指定管理者が中心となって行いました地域や企業などとの連携事業の具体的な事例報告をいたしました。晶子を顕彰する組織「与謝野晶子倶楽部」との共催事業や、イベントなどの提案・企画・プロデュースを行い地域活性に繋げる目的で結成された「堺まち物語協議会」の具体的な事業内容を、写真と共に詳しく紹介しました。特に、山之内商店街との連携として、商店街振興組合と堺市観光部との公募提案型協働推進事業について紹介したところ、山崎一穎会長から当館のチケットを商店街の特典連携店舗にて提示するとお得な特典を受けられることができるといった連携が良いとの意見をいただきました。

全体として、「文豪ストレイドッグス」(以下、「文スト」)とのコラボレーション企画(株)KADOKAWAとの共催によるスタンプラリーやクイズの開催についての報告が、参加者の関心を集めました。当館では、報告だけでなく館内で開催中のスタンプラリーを参加者にご覧いただきました。中原中也記念館も「文スト」とのコラボ企画の報告をされ、全体の質疑応答でも「文スト」に関するやり取りの時間が多く取られました。このような漫画やアニメとのコラボ企画は、文学館にとって新しい試みであり、新たな展開のひとつであったと思います。

また、与謝野晶子記念館における連携展示として「晶子と旅」のコーナーを紹介しました。全国を旅した晶子の足跡を紹介するこのコーナーでは、大型モニターによるタッチパネルを設置し、晶子の訪れたまちを、歌碑や風景写真とともに紹介しています。晶子ゆかりの市町村にアンケート調査を行い、ご提供いただいた情報を集約して発信しています。簡単に内容を変更・追記することができるシステムを導入しているため、新しく建立された歌碑や晶子関係のイベント情報なども随時更新できます。このように、全国にある晶子ゆかりの地とのネットワークを構築した連携展示を行っています。

堺環濠都市遺跡(SKT214)の発掘調査

續 伸一郎

▼はじめに
中世の町跡が眠る堺環濠都市遺跡(調査略号SKT)の発掘調査は、開始以来40年を経過し調査件数も1100件を超えています。これまでに数多くの重要な発見があり、歴史上の新たな資料や知見・情報を得ることができました。じつはこのさかい利島の杜周辺でも発掘調査が行われています。その成果をここで紹介したいと思います。



16世紀末頃に破却された屋敷地



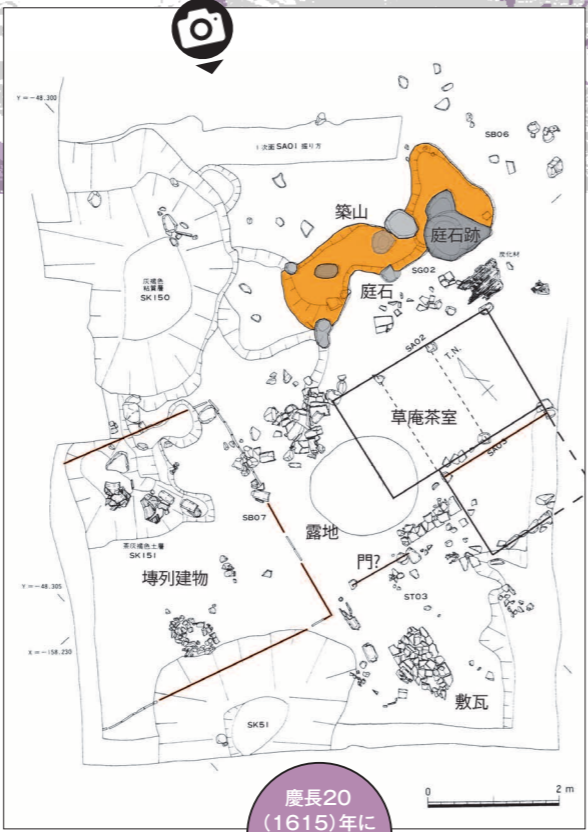
▼発掘調査の概要
千利休屋敷跡の東側に隣接した場所では、平成元(1989)年に発掘調査が実施されました。ここでは、調査した457㎡のほぼ全域で庭園遺構が発見され、築山や踏踞(つくばい)、縁・庇を伴う建物などが確認されています。この建物の中には茶事を行う部屋があったと考えられます。残念ながら、草木や苔・庭石などは失われてしまいましたが、粘土を貼った築山遺構や瓦と石で造られた遣水遺構などは、作られた当時の「侘び・幽閑」世界である「市中の山居」を想像させます。また、

建物の軒先には船形に作られた植木鉢が据えられ、建物と庭園間には井戸が掘られていました。ただこの調査地内では飛石や敷石跡が確認されなかったため、茶室へ至る露地遺構は調査地外の北側か東側に存在していたと考えられ、そこを含めると広大な面積をもつ屋敷地となり、堺でも極めて特別な場所であったことがわかります。

これらは、16世紀第3四半期末頃(1565~1575)にそれまであった建物などを除却した後に盛土整地を行い新たに作られています。そして、わずか十数年後の16世紀末頃にはこの屋敷地内の建物や庭園は全て破却されます。それは火災等による被災が原因ではなく、人為的なものでした。

破却された際にここで使用されていた道具類は持ち出されたと考えられ、わずかに踏踞付近から銅製灰匙や軟質施釉陶器(樂焼系)碗、「左近勇助左衛門尉」と墨書された備前播鉢片などが出土したただけでした。

その後、屋敷地全域に30cm程度の盛土が施されて、調査地南側には新たに築山遺構や門?(戸)と瓦片を敷き詰めた通路、そして草庵茶室と考えられる建物などが建てられます。しかし、前段階よりも明らかに規模も縮小しています。そして、慶長20(1615)年には大坂夏の陣前の火災により焼失しています。ここでの出土遺物は少なく、茶陶では珍しい軟質施釉陶器(香炉・匙・火鉢など)が見つかりました。



慶長20(1615)年に焼失した建物配置図



いては、利休の長男である紹安(道安)と関係するものと思われる。千紹安(道安)(1546~1607)は、利休没後に飛騨高山城主の金森長近を頼って堺を離れますが、次男の少庵が許された文禄3(1594)年には同様に京都に戻ったとされています。その後には伏見で秀吉の茶頭として仕えましたが、慶長3(1598)年豊臣秀吉の没後には堺に戻ったといわれています。屋敷地の規模などは小さくなりましたが利休屋敷と同じ場所、堺千家を再興したと推測されます。そして、慶長4(1599)年からは道安と名乗り始めますが、道安の没後は嫡子がいなかったため堺千家は途絶えたといわれています。

まとめ

堺環濠都市遺跡(SKT214)の発掘調査から四半世紀以上が経過しました。その後の出土資料の見直しや新たな知見を加味して調査成果について再考してみました。

あくまでも推測によるものなので確証はありませんが、現地を訪れた際に興味や興味を持っていただけたら幸いです。

参考文献:

- 『利休の茶室』堀口捨己 1949年 岩波書店
- 『堺環濠都市遺跡・今池遺跡発掘調査概要報告』
- 堺市文化財調査概要報告第25冊 1992年 堺市教育委員会
- 『特別展少庵四百年忌記念 千少庵』2013年 茶道資料館

▼屋敷地の所有者は誰か?
さて、このような特別な屋敷地の所有者が誰であったかが、問題になります。しかし、残念なことに名前などを記したものが出土してないので、確実な証拠はありません。あくまでも、状況証拠による推測であることを最初にお断りしておきます。

発掘調査で確認されている堺の町屋では、表道路側に主屋(礎石建物)その背後に蔵が建つという構造が一般的で、一軒あたりの敷地平均面積は約30㎡~90㎡程度でした。このデータと比較しても、この屋敷地がずばぬけて広いことが判りますし、所有者も堺南庄のなかでもトップクラスの人物であると考えられます。

これらの事象と発掘調査成果に合致する人物を探ると、有力候補は千利休(1522~

1591)になります。利休の堺屋敷は今市町に所在していました。残念ながら、詳細な記録などは多くありませんが、茶会記の記事から天正初めころに堺屋敷に新しい数寄座敷を造ったと考えられています。

利休は、天正19(1591)年に京都聚楽第の屋敷で豊臣秀吉の命により自刃します。その後の堺屋敷がどうなったかわかりませんが、恐らく破却されたと考えられます。そして、これらの事象は、発掘調査で推定された破却年代とほぼ合致しています。

また、その後同地に建てられた草庵茶室につ